2217　離島覚書（島根県西ノ島）

ウキペディアより引用

令和４年９月 16 日

別府港

中ノ島の菱浦港から島前内航船「いそかぜ」に乗る。観光客らしき人は見当たらず、通勤客が殆どだ。定刻通り 18 時 14 分に出発し、西ノ島の別府港に 18 時 21 分に入港した。わずか７分の船旅であった。

別府港には、①本土との間を往復する隠岐汽船のフェリー（おき、しらしま、くにがの３隻）と高速旅客船（レインボージェット）、②隠岐観光㈱が運航する島前内を巡回する内航船「いそかぜ」と「フェリーどうぜん」の両方が就航している。後者は島前内の来居（くりい）港（知夫里島）、菱浦港（中ノ島）、別府港の３つの港を結び、主として地元客の足になっている。道路を挟んで、右側が島前航路の乗り場、左側が隠岐汽船のフェリーと高速船の乗り場である。そして西ノ島観光協会は右側の建物に入っている。

西ノ島は後述する船引運河を境に旧黒木村と旧浦郷町に分かれていた。こうした経緯から、以前は旧浦郷町の浦郷港と旧黒木村の別府港の２ヶ所に船着場があった。しかし、浦郷と別府両港の間の道路事情が改善されたことや運航時間の短縮と経費の削減を図るため、浦郷港への発着は 2010（平成８）年に廃止され、現在は別府港だけになっている。

港には隠岐航路の創始者・松浦斌（さかる）（1851～1890）の胸像が置かれていた。松浦は西ノ島の焼火（たくひ）神社の神官だった人物である。1885（明治 18）年に汽船遠凌丸（96.68 トン）を共同購入して本土と隠岐諸島を結ぶ定期航路を始めた。ただ経営は苦しく、焼火山の所有林を全て伐採して資金を捻出している。しかし志半ばにしてこの世を去った。彼の意思は５年後には隠岐汽船㈱設立の礎となったという。

西ノ島には岩ガキのマーケティング調査や取材などで５～６回は来ており、最近では豊かな海づくり推進協会からの依頼で、専務をしていた市村さんとともに 2016（平成 28）年

１月にイワガキの取材に来ている。

歩いてこの日の宿である「旅館みつけ島荘」に向かう。この宿は地元の水産物が結構ならぶことで知られており、別府に泊まる時はいつもここを利用していた。

入浴後、大広間で夕食を食べる。以前は座敷だったが、椅子とテーブル席に変わっていた。この日の夕食はボタンエビ・しめ鯖・ハマチの刺身、モズク酢、サザエとヒオウギガイの焼き物、鯛の鍋物（豆腐、白滝、椎茸、えのきだけ、シメジ、京菜)、牛肉焼、ブリカマの塩焼きであった。生ビールと隠岐酒造（島後島）の「高正宗」を飲む。

別府港の船着場で左が隠岐汽船、右が隠岐観光の乗り場（左)、みつけ島荘の外観（右）

令和４年９月 17 日

黒木地区

朝食にはトビウオ塩干品の焼物とアラメの煮物が出た。隠岐地方はアラメをコンブと同じように煮て食べる。西日本各地では磯焼けによりアラメが姿を消しているところが多くなっているが、隠岐はまだ健全のようだ。

朝食を済ませてから、歩いて別府港の前にある島前レンタカーに行った。レンタカー会社は８時 30 分から始まるが、少し前に着いた。ちょうど職員が店を開けるところだった。当初予定を変更し、翌日の同時刻まで 24 時間借りることにする。

早速、県道 319 号を走り、旧黒木村の最東端の宇賀の集落まで行った。海岸沿いの細い旧道は車両通行止めになっており、峠越えの新道を走る。

宇賀港には 10 数隻の漁船が係留され、このうち３隻がイカ釣り漁船（小型２隻、中型１隻）であった。一番新しいと思われるイカ釣り漁船には網を揚げるドラムも整備されていたので、刺網を兼業しているのだろう。また刺網から掛かったゴミを取り除く作業をしている漁船も見られた。ここから正面に中ノ島の菱浦の集落が眺望され、さらに３つの岩が連なる名勝「三郎岩」が見えた。宇賀は世帯数 24 戸、人口 45 人のきわめて小さな集落である。港に面した家では５～６人が集まり、何やら協議をしていた。

次の集落が倉の谷で、人口 58 人、世帯数 55 戸である。ただしこの集落の奥まったところに特養老人ホーム和光苑があるので、ここの入居者が集落の大半を占めていることになる。集落の前には倉の谷港があり、３トン未満の小さな漁船が３隻係留されていた。

続く集落が物井だ。人口は 124 人、世帯数は 61 である。集落の前に物井港が整備され、３トン未満から５トンほどの漁船が７隻係留されていた。このうちの５隻がイカ釣船であ

った。

別府港がある場所が別府の集落で、宿泊施設や飲食店、さらに西ノ島ふるさと館などの観光施設が集中し、旧黒木村の中心地となっている。人口は 207 人、世帯数は 119 戸で、隣接する美田尻とともに多い。

美田尻の集落は人口が 213 人、世帯数が 114 戸で、ほぼ別府地区と同じ規模だ。集落内に中国電力の火力発電所、隠岐島前病院、農協とグリーンストアなどが置かれている。坂を登ったところには隠岐ハイブリッド蓄電池システム実証プラント（中国電力西ノ島変電所）があった。環境省の補助を受けて、中国電力㈱が蓄電システムの実証試験を行っている。蓄電池は、リチウムイオン電池とＮＡＳ電池（ナトリウム硫黄）の２種類である。隠岐諸島で風力や水力などの再生可能エネルギーが確保でき、蓄電池の導入により電力の変動調整が果せれば、将来はエネルギーの島内自給が可能になるという目論見なのだろう。

黒木御所

別府集落の東のはずれにこんもりとした小さな森があり、黒木御所の址が残る。黒木御所は後醍醐天皇が隠岐に配流（流刑）された時に、約１年間住んだとされる場所である。門をくぐると後醍醐天皇に関する資料を展示する「碧風館」が置かれ、その先に「建武中興発祥之地」「黒木御所阯」と書かれた石碑があり、その脇の石段を登ると後醍醐天皇を祀った黒木神社が鎮座する。さらに神社の右手の山道を登った頂が黒木御所阯で、ここに皇居が置かれ、後醍醐天皇が１年間住んでいた場所といわれている。黒木御所阯の石碑の周りは木の柵で囲われていた。石碑の両側には皇太子ご夫妻が行啓の折に植えられた赤松の木が育っている。しかし陽当たりが悪いためか松は元気がない。

後醍醐天皇（1288～1339 年）は第 96 代天皇であり、南朝の初代天皇であった。

当時、朝廷では大覚寺統と持明院統が対立したことから、相互に皇位を交代する両統迭立が行われていた。しかし 1318（天保２）年に大覚寺統の傍流から出た後醍醐天皇が即位すると、彼は自らの政策を安定して進めるため、大覚寺系へ一本化を進めた。そしてこれに反対する鎌倉幕府の討幕を図るが、２度にわたり失敗、1331（元弘元）年の元弘の乱で幕府によって捕らえられ隠岐に流されたのである。ところが１年後に隠岐を脱出し、現在の鳥取県船上山で挙兵し鎌倉幕府を倒して京都に帰還し建武中興を開始する。しかし建武の乱で敗北し、吉野に遷幸して 60 年間に及ぶ南北朝時代が始まった。

この隠岐への配流中の皇居がこの場所にあったということである。ただし室町時代に書かれた「太平記」に次のような記述があり、島後島・隠岐の島町にある国分寺も後醍醐天皇の皇居があったことを主張しており、学者の判断も分かれている。「太平記」には「御船隠岐ノ国ニ着キニケリ佐々木判官貞清府（コウ）ノ島ト云ウ所ニ黒木ノ役所ヲ作リテ皇居トス」と記されている。「府ノ島」とは国府のあった島ということであり、島後島に国分寺があることから、島後説を主張する学者もいる。

ただ西ノ島町では、西ノ島の別府（国府に対する別府）に行政官である佐々木清高の判官屋敷跡があったことや、島に残る伝承の数々を列挙し、別府説を主張しているわけだ。だが、決定的な証拠があるわけではない。

神社の前には別府港や島前の島々を一望できる展望所が設けられているが、展望所とは

名ばかりで、木々が生い茂りよく見ることができない。

黒木神社（左）、黒木御所遺阯（右）

西ノ島町役場

国道 485 号（別府と浦郷を結ぶ）を走り、浦郷に向かう。美田湾に架かる西ノ島大橋の手前に西ノ島町役場が置かれている。これまで町役場は浦郷にあったが、老朽化したため、新しく庁舎を建設し、昨年（2021 年）７月に移転したのだった。

役場は鉄筋コンクリート２階建てで近代的な建物に生まれ変わっている。ちなみに海士町役場は古い建物をそのまま使い、隠岐の島町の新庁舎は木材をふんだんに使った特徴ある建物に生まれ変わっている。役場の建物には、それぞれの為政者の哲学が反映されているようだ。

西ノ島町の面積は 55.96 ㎞^{2}、周囲は 116.1 ㎞で、島前３島の中では最も大きい。島の東側が旧黒木村、西側が旧浦郷町（昭和 21 年以前は浦郷村）であったが、1957（昭和 32）年に両町村が合併して西ノ島町になった。2020 年国勢調査時の人口は 2,788 人、世帯数は 1,145 戸である。1990 年当時の人口は 4,429 人であったから、この 30 年間で人口は約４割減となっている。直近の令和４年８月末時点の住民基本台帳上の人口は 2,621 人、世帯数は 1,492 戸なので、人口の減少に歯止めがかからず、しかも高齢化が進んでいる。

西ノ島は島の東側の黒木区、中央の美田区、西側の浦郷区に分かれるが、最も人口が多いのが浦郷区である。それぞれの区は小学校の学校区分を踏襲したものであった。しかし児童数の減少で 2016（平成 28）年に３校が統合されて町立西ノ島小学校となり、美田区の船越に置かれている。

レンタカーを駐車場に停め、役場の総務課に顔を出して町勢要覧をいただく。引き続き２階の産業振興課に案内してもらい、担当者から農業と水産業の現状について聴取する。

農業は畜産以外にはほとんど行われていない。以前は島内で稲作も行われていたが、減反政策のもとで田んぼは牧草地に代わった。現在、米を作っている家は１戸のみで、しかも自給用である。また野菜類もわずかに作られているが、ＪＡのグリーンストアに出荷する人が何人かいる程度で、島外に出荷する人はいない。

もともと平地が少なかったから西ノ島では山間部の土地を４つに区画して、後述するように牧畑と称する畜産と畑作の輪作体系に確立していた。しかし畑作の方は衰退し、現在は牛の放牧だけが残っている。牧草地の面積は 2,300ha ほどとのことだ。

水産業はまき網漁業がメインで、３社３ヶ統体制とのことだが、直接の担当者が不在だったので詳しいことは聞けなかった。

役場の裏手の高台に西ノ島総合公園が整備されている。公園には、テニスコート、野球場、体育館、中央広場、こども広場、ヘリポート、プール、駐車場が一団としてまとまっていた。

引き続きバイパスから西ノ島大橋を渡り、旧浦郷町に入る。橋を渡るとすぐに、「いかあ屋」というコミュニティ図書館が目に入った。2018 年夏にオープンした新しい施設である。「いかあや」というのは「行こうよ」という意味のこの地方の方言のようだ。人口が 3,000 人を下回る島に新しく図書館ができたのは文化を重視する町の姿勢を表すものだろう。残念ながら時間がなかったので、中には入らなかった。

道路を挟んだその前は船溜まりになっていて、漁船が係留されていた。

西ノ島役場の新庁舎（左）、旧役場跡に整備された町立図書館・いかあ屋

島根県漁協西郷支所

島根県漁協西郷支所は浦郷漁港の中心部に位置し、かつての栄光を象徴するかのように威容を誇る。しかし２階建ての建物は老朽化が激しく、そこかしこにある鉄は錆び、如何にも危なっかしい建物に変容している。２階の事務所に上がり、西ノ島の漁業の概要を聞いた。

同支所の管轄範囲は西ノ島と知夫里島であるが、知夫里島の漁業者は少ない。同島を含めた現在の組合員数は正 110 人、准 719 人の合計 829 人である。

営まれている漁業は大型定置網（１）、一本釣（235）、延縄（１）、曳縄釣（35）、中型まき網（３）、小型底曳網（２）、小型イカ釣（10）、刺網（23）、籠（１）、採貝藻（58）、養殖（22）である。（　）内は経営体数。

近年の水揚げ金額は 25 億円前後で推移しており、その大部分が中型まき網漁業によるものである。浦郷漁港を拠点に浦郷水産㈱、㈲共幸水産、㈱一丸の３社がそれぞれ１船団を有する。このうち浦郷水産㈱は大型定置網や後述するイワガキ養殖も兼業している。

曳縄漁業の対象は主として養殖用種苗となるヨコワで、９月末から 11 月にかけて採捕し、生簀で畜養馴致し、マグロ養殖業者に販売している。まき網にもヨコワが入るのでこれも蓄養している。蓄養場は浦郷大橋の南側に設けられている。ちなみにクロマグロの昨年の割当量は２万尾であった。

採貝藻の対象はアワビとサザエがメイン。養殖業は後述するイワガキとヒオウギガイを対象とする無給餌養殖である。かつては魚類養殖が行われていたが、今は撤退している。

国賀海岸と牧場

漁協で話を聞いてから国賀港に向かう。途中、由良比女（ゆらひめ）神社があり、その海側に「いかよせ浜」という看板が立ち、番小屋とイカをすくいとる人形が置かれていた。岸近くに産卵に来るアオリイカが手づかみで獲れるほどイカが集まった場所のようだ。

国賀港は比較的深い入り江になっていて、護岸が整備されている。集落はないので避難港のような存在だ。港では海岸の漂着ゴミを回収したフレコンバックをトラックに積み込む作業が行われていた。西に面する海岸には恐らく大量の漂着物が大陸からもたらされるのであろう。この回収作業は公共事業で民間業者（建設業者？）に発注されている。

国賀港から細い山道を登る。この一帯は摩天崖と呼ばれる海蝕海岸であり、標高 200m以上の切り立った断崖絶壁が続く。その景観は西ノ島を代表する観光資源となっている。坂を登るにつれて、牧草地が目立つようになり、そこには牛や馬が放牧されていた。

西ノ島は尾根から外海側は冬季の季節風が厳しく、後述する三度（みたべ）以外には集落はなく、しかも海岸は切り立っているため、土地のほとんどは山林か牧草地になっている。牧草地といっても種子を播いて牧草を育てているわけではなく、牛や馬が樹木や草を食べることによって植生の遷移が退行し、最終的に芝生が優占する。この結果、山の頂上付近は一面芝生に覆われて、緑の芝と青い海、牛や馬が美しいコントラストを描く。

国賀海岸の遊歩道に通じる駐車場に車を停めて、崖の端まで行った。その途中、宿で一緒だった男性（退職後、観光旅行を楽しんでいる）に遇った。私とあまり歳が離れているとの思えないこの男性は驚いたことにここまで自転車でやって来たという。標高は 250mほどあるから、別府の宿からよくここまで来たものだと感心する。その日の夜、風呂で一緒になったので「お元気ですね」と声を掛けると、電動機付きの自転車だったといっていたが、それにしてもたいした脚力であり、私など遠く及ばない。

広場には陸軍の監視所跡あり、そして戦後ソ連で抑留生活を送り、現地で亡くなった西ノ島大山集落出身の山本幡男氏の慰霊碑と瀬島龍三氏が揮毫した「顕彰の碑」が建っていた。

国賀の摩天崖（左）、放牧中の牛と馬（右）

ここから下り道になり、島の北側のイザナギ浦を経て、島の中央を開削した船引運河に

向かう。イザナギ浦の近くには牛舎があった。高台から西ノ島大橋の先にイワガキの養殖施設やマグロの畜養施設が見られた。上述したように曳釣りで漁獲したヨコワや巻き網に混獲されるヨコワを畜養、馴致している生簀である。

牧畑と畜産業

西ノ島の農業は黒牛の繁殖がメインである。海士町のように肥育農家はいない。

現在、西ノ島で飼養されている肉牛は約 620 頭で、年間 350 頭の子牛を出荷している。飼養農家数は 31 戸なので、平均すると 10 頭強出荷していることになる。島では年に３回（３，７，11 月）、子牛のセリ市が開催される。最近の子牛の相場は 40 万円強とのことだ。

冬季（11～４月）を除く期間、親牛は基本的に共有の放牧地に放牧している。冬季間は草が減るので牛舎に戻し、干し草を与える。また、子牛は濃厚飼料を与える。牧草以外は島外から移入（輸入）するので、円安でコストが上昇しているという。西ノ島では飼料米を作っていないが、島後島では飼料米生産が盛んで供給過剰となっており、農協は島後島で作られたＷＳＣ（稲発酵飼料）を西ノ島で活用できるようにしたいと考えているようだ。

西ノ島を含む島前３島では島の山地丘陵地帯を農地として活用し、牛馬の放牧と耕作を交互に繰り返しながら、食料を生産する輪転式牧畑が行われていた。起源ははっきりしないが 1200 年ごろにはすでに行われていたといわれている。本土から隔絶された隠岐の人々が生きるには丘陵地を有効活用し、自給自足しかなかったからだ。

丘陵地の土地を４つに区分、それぞれの区画は空山（あきやま）、粟山、麦山、空無山（くな）と呼ばれる輪作体系が組まれていた。空山とは文字通り空いている土地で、年中牛馬の放牧地として使われていた。粟山は牛馬の糞で肥えた土地で、粟、稗、牧草などを育てた。麦山はその後に麦の種を播き、麦を収穫した。空無山は空山とは反対に空きのない山で、大豆、小豆、そば、豌豆、甘藷などを年中作った。作物を収穫すると土地がやせるので、次の年は空山にして牛馬を飼い、その糞が肥料となったのである。

このような輪転式農業は、西ノ島の場合昭和 40 年頃まで残っていたが、その後、農作物を作らなくなり、結果として牛の放牧だけが残ったのである。なお知夫里島には、農業はやられていないが、当時の区画がわかる柵がそのまま残っている。

船引運河

山道を下ると船引運河に出た。

西ノ島は中央部の美田湾々奥の地峡部を境に東側が旧黒木村、西側が旧浦郷村に分かれていた。西ノ島の集落は三度を除いて全て内海側にある。したがって、漁場環境に恵まれている外海に出るには知夫里島との間の赤灘瀬戸を大きく迂回しなければならなかった。つまり外海に早く出るには運河があると便利だったのである。

両村の村長が運河の開削を提案し、島根県からの助成金を受けて、工事に着手した。当時は建設機械がなかったので基本的に鍬とツルハシによる人力作業であり、約９ヶ月を要して、1915（大正４）年に開通した。運河の総延長は 340m、幅は 5.5m であった。運河には橋が架けられ、2005 年に美田湾湾口に西ノ島大橋ができるまでは、ここを必ず通らなければならなかった。

当初は無動力船が主体であったが、漁船が動力化、大型化すると運河は狭くなり、これに対応するため 1964（昭和 39）年に 12mに拡幅している。

このような地峡部に運河を開削した例は対馬の「万関瀬戸」などが知られている。

橋を渡らずに美田湾岸の道路を南下し、西ノ島大橋の下をくぐって、浦郷に戻った。昼になったので、港の近くの「あすか」という食堂で海成ラーメン（750 円）を食べた。

運河に架かる橋から南（美田湾）側を望む（左）、橋から北（外浜側）を望む（右）

浦郷の集落

浦郷を最初に訪れたのはかれこれ 40 年ほど前になる。（社）海洋産業研究会のなかに「海洋牧場システム研究会」ができて、山陰沖のイタヤガイを中心とした海洋牧場構想の現地勉強会が開催されることになり、県の栽培漁業センターを訪ねたのだった。この時はフェリーで浦郷に入り、国賀荘（？）に泊まった。しかし 1996（平成８）年からフェリーは浦郷に寄港しなくなり、役場も移転したから、浦郷の町はすっかり寂れてしまった。

ただ、漁協の事務所が残り、まき網３社の根拠地も浦郷にあるので、西ノ島の中心であることに変わりはない。2022 年８月末時点の住基台帳によると 466 戸 834 人が住んでおり、島内で最も人口の多い集落となっている。

かつてフェリーターミナルがあった場所は西ノ島町観光交流センターに衣替えしていた。

三度

西ノ島の北側から西側にかけては冬季の季節風（北西風）が厳しいため、山の尾根を境に外海側はもっぱら牛や馬の放牧地として利用され、人が住むのは中ノ島と知夫里島に囲まれた内海（島前カルデラ）の海岸沿いである。外海に面する集落は三度だけなので、どのような環境なんか興味が湧いていた。

浦郷の次の集落が赤ノ江である。２つの谷沿いに家々が並び、97 戸 162 人が住む。集落の前には漁港が整備されている。漁港内には船外機を含めて 40 隻ほどの漁船が置かれていたが、何れも３トン未満の小さな船ばかりだ。

赤ノ江から半島を横断した行き止まりが、外海に面した三度の集落になる。急な坂道を登ると内海側一望でき、眼下に島根県の栽培漁業センターの建物が見えた。山道の最高点は 204mで、峠を越えると長い坂道が続く。三度の集落は三度川の川沿い、つまり谷にそって細長く形成されていた。川は三面張りで味気ない。川の両側は道路になっている。

三度漁港（第１種）の入口は西南西を向いており、冬季の北西風がまともには吹き込まない位置関係にある。また集落の両側は高い山なので、やはり北西風を避けることができる立地条件にある。つまり外海に面した厳しい環境の中にあって、相対的に恵まれた場所であったことが集落形成の要因だったと考えられる。後述する中上さんによると、三度はもともと武士が移住してできた集落で、智恵のある人がいたという。

漁港の入口には防波堤が築かれ、港内には４隻の漁船が係留されていた。ただ年金漁師ばかりで、出荷はしていないようだ。

家は 30～40 軒ほどあると思われるが、すでに壊れた家や解体中の家もある。2022 年８月末時点の人口は 27 人、世帯数は 15 戸で、西ノ島では最も人の少ない集落であり、恐らく半数以上の家は空き家だろう。

港の前の家は外壁の修理作業が行われていた。近くでヤギが３～４頭飼われている。港にはフレコンバックが積まれていた。そこで作業をしていた人によると、国賀港と同様、海浜の漂着ゴミを回収しているようで、ボランティアではなく、公共事業として営まれているという。

小さな川の両側に形成された三度の集落（左）、三度漁港と湾口部の防波堤（右）

中上養殖場

三度の集落から西ノ島の南西端の集落である珍崎に向かう。ここに隠岐のイワガキ養殖の先駆者である中上光さんの中上養殖場がある。だいぶ以前に中上さんを訪ねたことがあるが、当然、道を覚えているわけがない。珍崎漁港（第１種）に着いたが、護岸の工事中で中上養殖場は見当たらない。近くを通りかかった高齢の女性に聞くと、下の道を海岸に沿って進んだ先端だという。

約束していた 14 時に伺うと、中上さんは３人のメンバーと一緒に作業小屋でヒオウギガイの選別作業をしているところだった。道路を挟んだ山側の事務所に場所を移して取材した。

中上光さん（67 歳）は 1955（昭和 30）年にこの珍崎で生まれた。近畿大学の農学部水産学科で学び、1979（昭和 54）年に島に戻った。24 歳の時であった。島根県栽培漁業センターに勤務するかたわら、父親が取り組んだイタヤガイの養殖を手伝う。

イタヤガイは山陰沖で大量発生を繰り返した二枚貝類で、ホタテガイと同様、貝柱を食する。ちなみに「貝殻節」は鳥取地方で大量発生したイタヤガイを漁獲するときに歌われ

た労働歌である。上述したように農林水産技術会議の大型プロジェクト・「マリンランチング計画」の対象生物として研究が進められていた貝でもある。

イタヤガイは天然採苗した稚貝を用いて養殖していたが、1985（昭和 60）年ごろからイタヤガイの浮遊幼生が採れなくなった。このため、養殖の対象種をヒオウギガイに切り替える。この天然採苗したヒオウギガイの中にイワガキの種苗が混ざっていたそうだ。父親は常々、「同じことをやっていてはダメだ」といっていたそうで、寿司種のトリガイやアカガイの養殖にも興味を持っていたが、島根県ではあまり食べられていなかったイワガキに注目し、種苗生産にチャレンジすることになった。

マガキ養殖の場合は種苗のほとんどは天然採苗である。そして種苗の大部分は宮城県から全国に供給されている。マガキの場合は特定の海域に高密度で養殖されているため（母貝集団が形成されている)、浮遊幼生の密度が極端に高いことがこのことを可能にしているわけだ。これに対し天然ものしかないイワガキは母貝が少ないため、浮遊幼生の密度は極端に少なく、かつ不安定である。したがってイワガキの養殖用種苗は人工的につくる必要があったのだ。

そこで中上さんはイワガキの種苗を自ら人工的につくることに挑戦することになる。当初、珍崎の北にある栽培漁業センターの施設を借りて試験研究に取り組んだが、センターの施設を間借りするのは不自由だったことから、1987（昭和 62）年に漁業近代化資金を借りて独自に現在の建物を建てた。翌 1988（昭和 63）年からイワガキの種苗生産の研究に取り組むことになり、島根県水試鹿島分場にいた勢村さんと連絡をとりながら開発を進めるが、勢村さんは忙しく、あまり当てにならなかったという。しかし、志を同じくする研究者が県の職員にいたことは心の支えになったにちがいない。

中上さんは、当初、成熟した天然イワガキの母貝をタンクに入れて自然授精させ、受精卵は確保することに成功するが、１週間で全滅したそうだ。餌がなければ成長できない。そこで餌の開発に着手する。海産クロレラ（ナンノクロロプシス)、パブロバ、キートセロスなどの植物プランクトンの餌づくりに傾注することになる。

そして、1992（平成４）年に努力の甲斐あってイワガキの種苗生産に成功した。37 歳の時であった。研究に着手して４年、島に戻って 12 年が経っていた。

自ら生産した種苗をもとに日本で初めてのイワガキ養殖がスタートし、1994 年からごく少量ながら養殖イワガキの販売が始まった。

中上さんは自ら開発したイワガキの種苗生産のノウハウを独り占めすることなくオープンにして、この技術とノウハウは島根県栽培漁業センターに引き継がれ、同センターで量産化が進んだ。「海はみんなのものだから、みんなで使うべきであり、みんなで取り組むべき」という中上さんの信念が、隠岐を「イワガキの島」へと発展させたのである。

ここで、中上さんのイワガキ養殖の概要を紹介しておこう。

中上養殖場のメンバーは、中上さんを含め４人である。若い人は甥っ子で、中高年の２人は地元珍崎の人である。イワガキの他にヒオウギガイも養殖している。作業場は漁協の施設で、もう一つの経営体と半分ずつ使用している。

イワガキの養殖施設は西ノ島大橋の南側に置かれている。養殖筏（12×10m）はＦＲＰ製のコンポートパイプ（耐久年数は 50 年、ノリ養殖で使われている）を使用してを組み、

その下に垂下連を吊るしている。

栽培漁業センターで大量かつ安定的にイワガキの種苗をつくることができるようになったので、自ら生産するよりも安価になったことから現在はセンターから種苗を購入している。ただし後継者の甥っ子には種苗生産の技術を学ばせるため種苗生産施設は残し、小規模に種苗を生産している。ちなみにイワガキの産卵期は６～10 月である。

イワガキの種苗が付着したホタテガイの原盤をロープに通し、プラスチック製のスペーサーを挟んで 10 ㎝ほどの間隔で吊るす。イワガキは海水中の植物プランクトンを摂餌して成長する。３年後に団塊状に成長したイワガキをばらして収穫する。グラインダーで殻の周りの付着物を取り除いて出荷する。大きさが不揃いなので、出荷に適さない小さなサイズのものは行燈籠に移し、さらに垂下して育てる。最終的に全部出荷されるのは５年ほどかかるそうだ。

出荷サイズは後述する「隠岐のいわがきブランド化推進協議会」により、次のように規格されている。むき身の歩留まりは 18～25％なので、Mサイズでもむき身重量は 50ｇほどになり、マガキよりだいぶ大きいのが特徴だ。

Ｓ（200～249ｇ）、Ｍ（250～299ｇ）、Ｌ（300～349ｇ）、２Ｌ（350～399ｇ）、３Ｌ（400～499ｇ）。

海士町ではばらした後に耳吊り養殖に移行する、あるいはシングルシードから養殖するなどの取組みが行われているが、中上さんのところでは以下の理由から、耳吊りやシングルシードは採用していない。

耳吊りは裏表が汚れる。シングルシードは付着面が柔らかいので壊れやすい。また、付着器から剥がすタイミングが難しくヒラムシなどの食害を受けやすいという。さらにパールネットで養殖するが、収容中に揺れるためイワガキの場合は形がそりかえってしまい、見栄えが悪くなるという。

イワガキの出荷量は年間 10 万個を目標にしているが、実際は７～８万個にとどまる。昨年、一昨年は新型コロナの影響で需要が大幅に減った。中上養殖場の年間売り上げはヒオウギガイを入れて 2,900 万円ほどであるが、特に 2020 年は 1,000 万円ほどの減収だったという。

中上養殖場のメンバー（左）、中上養殖場の作業場（右）

一方、イワガキの生産は海の環境にも大きな影響を受ける。昨年は雨が少なく、雪も積もらなかったので、陸域からのケイ素の流入が少なく、餌となる珪藻プランクトンの生産

力が低下、イワガキの身入りは悪かった。

中上さんが生産したイワガキはカキの専門商社である㈱あけぼの海産（兵庫県相生市）への販売が８～９割を占めてメインである。ネット通販などの直販が約１割。残りは漁協のルートで出荷している。漁協はロゼ倶楽部と境港の魚市場に出荷しているそうだ。

海上作業

取材を終えたころ、ヒオウギガイの選別作業も終わった。これから選別したヒオウギガイを沖の漁場に設置しに行くというので、作業船に同乗して養殖場を見に行くことにした。その前に台風接近の予報がでていたことから船外機を斜路に引き上げることになった。

中上さんを含めた４人は船外機を斜路に引き上げる作業に入った。木に滑車を取り付け、軽トラでロープを牽引するきわめて原始的な方法である。斜路にころが敷いてあるが、本数は少なく不揃いなのでけっこう苦労していた。

もう 50 年ほど前のことになるが、北海道電力の伊達火力発電所の新設にあたって海の環境調査をしたことがある。伊達漁協の伊藤さん（後の同漁連副会長）に調査船を出してもらったが、当時、伊達紋別にはまともな漁港がなかったから、砂浜にころを敷いて漁船を上げ下げしていた。ころの丸太には魚油が塗られていて、浜にはウインチも整備されていた。半世紀前よりもこの現場は遅れているなと想いながら傍観した。

ヒオウギガイは座布団籠に収容されている。籠の洗浄と死貝の除去、収容数量の調整のため定期的に選別作業を行っており、この日は朝から作業をしていたようだ。選別が終わった籠は作業場から大きな台車に乗せ、護岸から漁船に積み込まれた。

ヒオウギガイの養殖場はイワガキとは別で､港から 15 分ほど走った珍崎集落に沖になる。港を出てすぐのところに小型定置網が設置されていた。この定置網は珍崎の集落のものではなく、隣の赤ノ江集落の人のものだという。

ヒオウギガイの養殖場の水深は 40mほどである。水深５ｍの位置に幹綱が張られ、この幹綱に１ｍ間隔で座布団籠を吊るす。座布団籠は６段分がつながっている。幹綱の長さは約 100mのいわゆる延縄方式だ。綱を船上に引き上げると、手際よく座布団籠を取り付けていく。作業は 30 分ほどで終わり、港に引き返す。なおヒオウギガイの養殖場にはイワガキも吊るされており、こちらも見せてもらった。

選別したヒオウギガイを収容した座布団籠の積み込み作業（左）、座布団籠の設置（右）

港にはコンポースで組まれた筏があり、袋に入れたホタテガイの原盤が吊り下げられて

いた。原盤には一昨年生まれたイワガキの稚貝が４～５個付着していた。この種苗は甥っ子が作ったものだという。

イワガキ養殖

中上さんによって種苗生産が可能となったイワガキは島根県栽培漁業センターによって量産化されることになる。同センターでは 1998 年からイワガキの種苗生産を開始した。そしてこのことが隠岐諸島にイワガキ養殖を普及させる重要な役割を果たしたといえよう。現在はホタテガイの原盤に 10 個以上のイワガキ種苗が付着したものを、年間 10～20 万個生産している。そして種苗の配布を受ける経営体は 30 に及ぶ。

センターで生産した種苗は隠岐諸島の養殖希望者に配布され、イワガキの養殖経営体は増加していった。参入した養殖業者の多くは、既存の漁業者ではなく異業種からの参入やＵ・Ｉターン者だった。

図１は隠岐諸島におけるイワガキの生産量と生産額の推移を示したものであるが、市場出荷が始まった 1998（平成６）年から急速に普及、10 年後の 2007 年には１億円産業になった。さらに 2013 年には２億円と倍増、2015 年には 2.8 億円とピークに達し、出荷個数は 100 万個を超えた。その後、足踏みを続けるが、2020 年は新型コロナの影響を受けて需要は激減した。現在イワガキの需要は回復基調にあり、来年はさらに増える見込みだという。

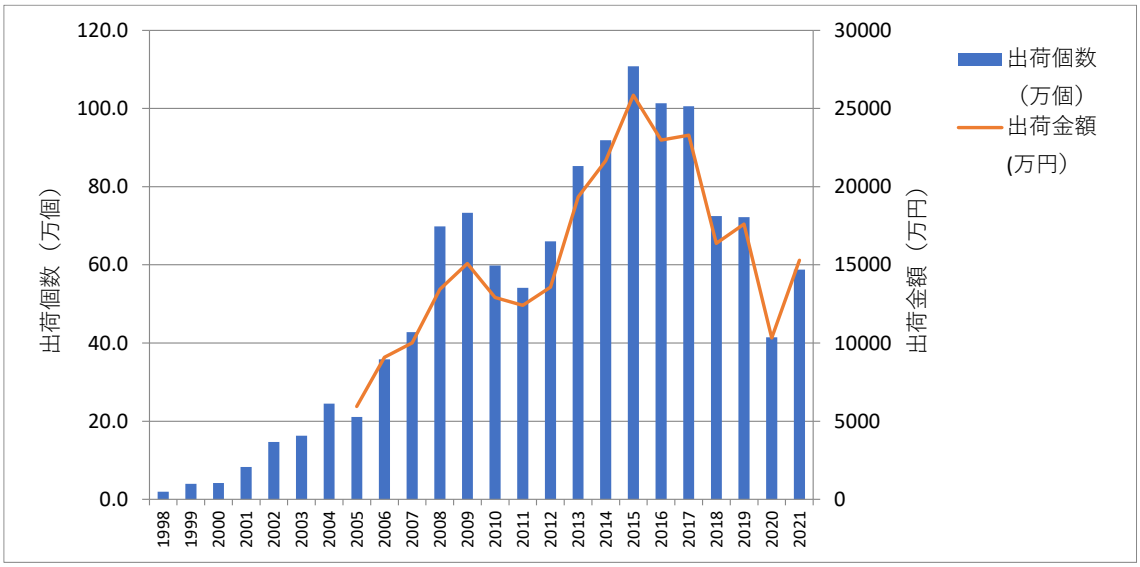

図１　隠岐諸島における養殖イワガキの出荷個数と出荷金額の推移

島根県隠岐支庁農林水産局資料より作成

イワガキは隠岐４島で養殖されているが、西ノ島のイワガキ養殖の経営体は 12 であり、発祥の地であることを反映して４島の中では最も多い。2016 年に取材した時点の経営体数は 11 経営体であったから、１経営体増えている。

漁場は、浦郷の湾内が中心で、浦郷大橋の南側に集中している。養殖施設は、筏式と延縄式の両方で営まれてきたが、最近はＦＲＰ製のコンポーズパイプを組んだ筏式が多い。養殖方法は基本的に中上さんの方法を踏襲している。

2021 年の西ノ島のイワガキ出荷実績は 25.8 万枚で、やはり４島の中では最も多い。生産したイワガキは境の魚市場、専門の問屋、ネット等による直販、地元飲食業者などに出荷

されている。

2000（平成 12）年にイワガキ生産者、漁協、隠岐４町村と島根県で、「隠岐のいわがきブランド化推進協議会」が設立された。事務局は隠岐支庁水産局水産課内に置かれている。イワガキは生食で消費されることが多いから、安全性を確保するため、「衛生管理マニュアル」を作成し、養殖場の選定、品質管理、衛生管理、定期検査などを定めるとともに紫外線照射した滅菌海水による 20 時間以上の浄化を義務付け、トレーサビリティシステムを導入している。

養殖中のイワガキ（左）、イワガキ養殖の施設（右）

珍崎

中上さんの住む珍崎は島前湾西側の最南端に位置し、人口は 58 人、世帯数は 39 戸の集落である。西ノ島町内では三度、宇賀に次いで小さい。

集落の一番奥の山側には旧小学校があった。中上さんが小学生のころ、児童は 60 人ほどいたという。人口は今よりもはるかに多かったから、集落内には４軒の店舗もあったそうだ。しかし、人が減り、子供がいなくなって小学校は廃校になった。

明治時代の珍崎の集落は半農半漁の生活を営んでいた。魚を出荷しようにも本土までの輸送は時間がかかったから、漁業は発達しなかった。集落の男たちは遠洋漁業などの船乗りとして働いた。珍崎に限らず、隠岐は船乗りが多かったようである。島では現金収入が得られないから、船員が重要な現金収入源だったのである。中上さんの祖父も船乗りで、北洋にも出漁していたという。

戦後、地元での漁業に転向するが収入は十分ではなく、上述した牧畑で食料を自給し、豚や牛も飼っていた。この牧畑は中上さんが子供のころまで営まれていたという。また、米を作っていた時期もあるらしい。

珍崎の集落を抜け、半島の先端にあたる黒島鼻に向かう。細い山道で少々心細い。

岬の先端に近づくと、牛の群れに行く手を阻まれた。道路上を牛が占拠しており、前に進むことができなかったのだ。おそらく放牧されていた牛が牛舎に戻るところだったのだろう。岬の方角に向かって歩いて行くところだった。

しかがなしに先端まで行くことは諦めＵターンした。元来た道を戻り、浦郷に着くと、まき網船団が活動を始めていた。

珍崎の集落（左）、黒島鼻周辺の牧草地と牛（右）

まき網船団

上述した通り、西ノ島には、㈲共幸水産、浦郷水産㈱、㈱一丸の３社３ヶ統の中型まき網があり、浦郷漁港（第３種）を拠点としている。各船団はそれぞれ専用岸壁を有して漁船が係留されていた。

まき網船団は網船（本船）１隻、灯船と曳船が５隻、運搬船が１隻の合計７隻で構成されるので、各社の岸壁には船団を構成するたくさんの漁船が並ぶ。

すでに 17 時を過ぎていたので、各船団は出漁の準備に取りかかり始めていた。㈲共幸水産の船は「千鳥」という船名であるが、その前を通りかかると乗組員が集まり始めていた。１船団の乗組員は 27～28 人であるが、20～30 歳代の若い人が目立つ。西ノ島の場合は乗組員に外国人はおらず、島外からのＩターンの若者が多い。

西ノ島のまき網の漁場は島周辺が基本であるが、近いため日帰り操業である。夕方から出漁準備にかかり、夜間操業して、朝、港に戻る。漁獲物は運搬船が境港の魚市場に出荷する。昼間は寝て、夜仕事をするというパターンだ。九州のまき網船団は満月の期間は「月夜間」といって操業を休むが、西ノ島の場合は休まない。ただし、機械類の進歩によって漁獲効率は高まっているので、年間の操業日数は 180 日前後といわれているからそれほど厳しい職場ではなくなっている。

本船で出漁準備をする乗組員（左）、共幸水産の灯船２隻（右）

もともとまき網漁業の乗組員は島の人たちによって担われていたが、若者が減少あるいは島外に職を求めてでていったため、島民の中から乗組員を確保するのが難しくなってき

た。このため県漁協の西郷支所では、新規就業者を島外に求めてざるを得なくなっており、積極的な求人活動を展開している。

㈲共幸水産とは反対側の岸壁には㈱一丸の船団が係留されており、こちらも少し遅れて乗組員が集まり始めた。

美田の集落

西ノ島大橋を渡り、国道 485 号から右折して南下、波止（はし）の集落へ向かう。集落の少し手前に「リゾ隠岐ロザージュ」という宿泊施設あった。ここにはコテージやログハウスもあるようだ。

波止は人口 83 人、世帯数 43 戸の集落で、島前湾の最も南に位置し、湾のちょうど向かい側には珍崎の集落が見える。波止の集落は谷あいに形成され、その前面に港湾が整備されている。港内には漁船が４隻、プレジャーボートが１隻係留されていた。また、岸壁から釣り糸を垂れている人もいた。

集落の手前に墓地があった。墓に水をやりに来た男性に話しかけると、この集落は船乗りが多かったという。

道路はここで行き止まりである。波止から焼火神社に登る山道はここが基点となっている。レンタカーを借りる時に焼火神社への道は崖崩れで途中までしかいけないと聞いていたので神社の下の駐車場まで走った。神社のある焼火山は標高 452mで西ノ島では最も高い。残念ながら道の海側は樹木が茂り、海を眺めることはできなかった。

波止から美田湾沿いを北上する。最初の集落が市部（65 人、35 戸）、続いて大津（160 人、89 戸、小向（174 人、117 戸）、船越（328 人、172 人）と続く。湾の西側には船越を除くと集落はない。美田湾の東側の護岸には漁船が多数係留されていた。

翌日はガソリンスタンドが休みのところが多く、唯一営業しているのが小向地区にあるガソリンスタンドだとレンタカー会社で教えられていたので、そのスタンドを確認し、明日の営業時間開始時間を確認する。農協のグリーンストアをのぞいて売っている農産物を確認し、宿に帰った。

この日の夕食は、ボタンエビ、サザエ、ハマチ、マダイの刺身、ブリ照り焼き、アジ酢漬け、カキフライ、カニとカニみそ鍋、合鴨焼きであった。生ビール１杯と隠岐酒造が最近つくり始めた海藻焼酎のロックを１杯飲む。

焼火神社の入口（左）、美田湾沿いの集落と漁船

令和４年９月 17 日

大山集落と耳浦海水浴場

レンタカーの返却時間は８時 30 分なので、７時前に朝食を済ませ、未だ行っていない場所を回ることにした。朝食の水産物はヤナギガレイの焼きものだった。

最初に向かったのが、中ノ島との海峡に面した南端の集落の大山である。集落は小さな湾沿いに形成されている。別府港の港湾区域に含まれる港には 10 数隻の漁船が係留されていた。この集落から先は大山二号川沿いを登る山道となり、人は住んでいないのでUターンする。

続いて別府港から半島を横断して外海側の耳浦海岸を見に行った。峠の位置に当たるトンネルを抜けると長い坂道になり、突き当りが耳浦海水浴場だ。比較的深い入り江になっている。敷地内にはシャワー室やトイレも整備されていた。

下り坂では気が付かなかったが、Uターンして上り坂になると山間部の急斜面に牛がたくさんいるではないか。山の下が牛舎になっていて、そこに青年が働いていた。彼の話では子牛を含めて 112 頭の牛を飼養しているとのことだった。牛は干し草が欲しいので夕方になると勝手に牛舎まで戻ってくるという。

尾根沿いの山道を縦断して船引運河に出る目論見だったが、あいにく道路が決壊している箇所があるらしく通行止めになっていた。仕方なしに国道 485 号から小向集落のガソリンスタンドに行き、給油する。

続いて島の水源地である美田ダムを訪れた。治水、上下水道用水、不特定用水の確保のために設置された多目的ダムで、1978（昭和 53）年に完成している。

時間が迫ってきたため別府港に戻り、レンタカーを返却して宿に戻った。

耳浦海岸（左）、山間部に放牧されている牛（右）

西ノ島ふるさと館と碧風館

宿で荷づくりをしてチェックアウト。フェリーの出発まで１時間強の時間があったので、港の近くにある西ノ島ふるさと館と碧風館を見ることにする。

別府港の船客待合所に荷物を置き、最初にふるさと館に入った。９時オープンなので一番乗りだった。両館共通の入館料 500 円を支払う。ふるさと館は２階建てでメインの展示は２階になる。

生活用品、牧畑農業の解説、漁業や養殖業の展示、古い漁船、民具や文化財、島内で発

掘された遺跡類など西ノ島を知る上での貴重な資料が展示されている。

島出身の木村康信氏が隠岐諸島で収集した野鳥のコレクションが展示されていたが、残念ながら標本はビニール袋の中に収容されていて剥製になっていないので臨場感がない。さらにシベリアの収容所に抑留され厳しい強制労働によって死亡した西ノ島大山集落出身の山本幡男氏の足跡と遺書が展示されている。摩天崖にあった慰霊碑の人物だ。山本氏は現在の東京外語大学のロシア語科に学んだ。作家・辺見じゅんの著書「収容所から来た遺書」で取り上げられ、小説やテレビドラマを通じて多くの人々に感動を与えた人物だが、西ノ島に来て初めて知ったわけだ。

ふるさと館の係員の女性は話好きで、「イルカにロープが絡まった場合はどうすればいいか」と質問を浴びせてきた。日本海側の捕鯨は九州西岸から山口県の青海島や見島まで営まれていたが、隠岐では捕鯨に関する資料を見なかったのが不思議だった。ただしイルカはたくさんいるようだ。

続いて後醍醐天皇の資料館である碧風館を訪ねる。ここも私 1 人だった。女性の案内係がいて絵を示しながら丁重に説明してくれた。

御所の近くに漁協の黒木出張所や島根県の地方事務所が置かれていた。

西ノ島ふるさと館（左）、碧風館（右）

別府港を 10 時 20 分に出発するフェリーしらはまに乗る。境港に 13 時 20 分に着いた。すぐにバスに乗り、米子空港で下車。空港の軽食喫茶で昼食のカレーライスを食べる。飛行機の出発までかなり時間があったので、待合室でパソコンに向かいヒアリングメモを作成する。16 時 45 分発の全日空便で羽田空港に向かう。